

特集

同志社に期待する人間像

生きかたの原理をみつける

井ヶ田 良治

△法学部教授▽

同志社の枠をこえて この問題を考えてゆく場合、同志社という枠、つまり同志社特有の性格や人間の型を考えるのではなく、むしろ現在の日本の国民が要求している目標とか夢に対して、同志社がどうかたえてゆくか、ということが大切なのではないかとおもいます。ですから、同志社というのはいさいごにくつつくわけで、現代日本の諸問題に対処してゆくその結果として、なるほど同志社というものがあるんだな、ということになるのではないのでしょうか。わたしは同志社にきて十四

年になりますがいつでもつよく感じるのは、まず同志社という一定の枠、あるいは新島精神という枠、あるいはキリスト教精神という枠があるということです。その枠から問題を出発せようとするものですから、開かれた形で「われわれはどのような人間を育てるのか」という問題を話しあうてゆくことができない。その結果、いい意味でも悪い意味でも非常にせまい討論しかできないし、せまい目標を追究することしかできないということになるとおもいます。ですから、同志社の枠ははずして大学教育のなかでどのような人間をつくり出してゆくかというふうに問題をたててみたいのです。

八人にたいする責任 わたしは非常に有利な、恵まれた条件のなかで現在のわたしが形成されてきたことをつよく感じます。という

のはどういうことかという、わたしがこれまで教育をうけたり、ものを考えたり、あるいは書物を読んだりしてきた状況というものが、どんなものに支えられてきているのかということを考えるのです。同じことは現在の学生についてもいえるとおもいます。わたしはいつも学生にいうんですけれども、大学にくる人は同じ年令の九人のなかの一人だけなので、かりにどんなすぐれた人間になったところで、あるいはすばらしい思索をかきね、技術をつみ、そしてすばらしい科学的成果をあげたところで、それは残りの八人の人びとの労働の成果の上にのっかっている、このことをもしわすれたら、これは非常にえらいことになるんじゃないかと。八人のひとに責任をもつてものを考える人間になるのでなければ、どんなにいい成果をあげても、人間としていちばんいいものが抜け落ちてくること

になります。

わたし自身は前から労働者教育に関心をもつて、労働者の人たちといろいろ話したりしていますが、そこでつよく感じることは、労働者がもっている大学に対する期待と、大学の現実に対する失望です。また現実社会のなかで大学に行かなかった労働者の人たちが、自分を解放しすぎた人間になり、将来にむかって日本を少しでもよくしてゆこうという希望をもっているときに、わたしなんかは大学でいったいなにをしているのかと考えさせられます。

エリート意識をふりすてる いつでもわたしが心の中でひっかかるのはともすれば現在もっている自分の人間的価値、技術的能力などを、自分自身で実現したり作りあげたものだと考えていることはなからうか、ということとです。これは極端ないい方になりますけど、官公立の大学にみられがちな一種のエリート意識、あるいは能力主義的人間観をいっぺん徹底的にふりすてる努力が必要なんじゃないかとおもいます。そういう意味では個々のもっている能力、弱点、長所などとらわ

れない、どんな人間をも人間として尊重できる、差別感をもたない人間観をもつ、こういうことがどうしても必要になるわけですし、そしてその逆に、現在の有利な、あたえられたゆたかな条件が、むしろ自分の責任を重くしているという形でとらえることが大切なんじゃないかとおもいます。

人間の可能性への信頼から そこで、一つの歪みの現実にとらわれないで、人間を人間として尊重できるということはいったいどういうことなのか。それはわたしにいわせれば、絶対的な人間信頼とでもいうべきものを前提にしなければどうにもならないという気がします。たとえば学問の体系にしても、人間に対する絶対的な信頼を与えるものを考えます。わたし自身は神を信じていない人間であるためでしょうが、人間というものは唯物的な世界のなかで物質の一つの発展した段階として形成されてくる。そしてそういった人間が他の動物たちとちがっているところは、自然を改造する能力が無限の可能性として存在し、それが将来にむかって無限に発展する可能性をもっている点にあるとおもつた

ですが、このような人間の無限の可能性に対する確信、この意味でわたしの人間信頼はどうしても唯物的なものを基礎にするわけですし、またこの意味でわたしは唯物論をもっともすぐれた人間主義的な思想だと考えています。とにかく人間の生き方として、人間の無限の可能性を信じすべての人間の自己変革と発展の可能性を確信し、それ故に現実を創造的に変革してゆく人間がいちばんのぞましいのではないか。その時にはじめて、人間のもつ条件や能力の差異による差別をすてこれに反対し、相互に協力しあって未来の可能性を、きりひらいてゆけると思います。

生きかたの原理を発見する ところが実際の問題として考えてみますと、とくに日本の場合に、科学や学問の理論は卒直にいったばらばらになっている。そのために、一方ではわたしが学んできた歴史にしても社会科学にしても、きわめて精緻な理論、それを基礎づける原理的なものや世界観がありながら、いつでもそれは一人ひとりの人間の生き方にかかわってこない面がつよい。かんたんにいえば理論が思想になりきらない、あるいはいつでも

理論が思想とは別なところで問題をたてられてしまふことがあるのではないかとおもいます。これは日本の学問やインテリゲンチヤがもっている弱点に通ずるものなんでしょう。

現在の大学においては特殊専門化がなされて各学問がばらばらになってしまひ、あるいは各専門が切り離されてしまつて、統一性が失われています。これはもちろん近代科学の発展の一つの特徴でありましようが、そのみならず、日本の大学、日本の学問のなかに近代の日本がもっている特殊な歴史状況からくる専門分化の極端な性格がでてゐるようによもいます。ですから日本の知識階級と呼ばれる人間は、統一的な人間性をうしなつてゐる。たとえば社会科学をやっているものであれば、いちばんさいしよに弁証法的唯物論をとばして史的唯物論にとびつく。そのため、そこにだされてゐる原理や法則を学ぶ場合にも、一つのできあがつた理論として輸入するだけです。それを前提にしてものを考えるということになる。ところがほんとうはそうではなくて、史的唯物論に示されてゐる社会発展の法則性は、もとをただせば自然の世界にたいする認識からみちびかれたもので

す。そういう点では人間をも含めた広い意味での物質世界の法則性の認識からはじまつてはじめて人間社会の法則性に対する確信が生まれてくることになるわけです。ところが史的唯物論から出発して自然法則の認識がぜんぜん消え失せてしまふ。これではいかに精巧な理論がつくられても社会の発展法則の存在根拠に確信がもてない。だからいつでもすてうる理論（技術？）として社会科学が考えられ、思想にうらづけられず、人間の生き方とは関係がなくなつてしまふ。

要するに、自然、人間、社会に対する認識というものを、たんに理論の問題としてではなく、人間の生き方そのものにかかわるような形でつかまえて、そのなかから人間の生き方の原理をみつめてゆくような、そういう人間を作つてゆくことが、大学における重要な問題なのではないかと考えています。

学問の綜合性

嶋田啓一郎

△理事・文学部教授△

同志社に固有のもの　ただいま井ヶ田先生のお話をうかがつて教えられたことは、同志社という殻からさきに出発するのではなくて、普遍的な「大学」の問題から考えるのであればならない、そうでないと狭隘なものと考えかたにおちいつてしまふといわれた点です。長いあいだ同志社に育つてきたわたしには学ぶ点がありました。井ヶ田先生が憂慮されるのは狭隘な、いまの社会と遊離した独善的な境地でものを考えるということであるとおもいますが、しかし狭隘さが排除されるということは、同志社に固有のものが排除されるということになつてはならないとおもふのです。

大学というところ　そこでまず、大学というものの在り方を考えてみましょう。シュライエルマツヘルによると、大学 Universität というものは、小学校から高等学校までのような学校 Schule とちがい、また学者たちの集まりである学士院 Akademie とちがつて、教師と学生とがともに教育とともに研究にいそむ場であると申しました。大学においては単に「習う」lernen のではなく、

「探究」forschen 態度が大切になってくるのですが、探究の中心は「学ぶことを学ぶ」すなわち学問の方法論を確立し、総合的なものの考えかたを把握することでありま

す。ところが現代の大学教育は、方法論の確立よりも、確立された技術の教育のほうに重点をおいているのではないかとおもいます。

方法論的にものを考える、これが大学の特色でなければならぬのです。同時にまた大学は *universitas* という言葉が含蓄しているよう

に、人々の共同体であって、学生諸君をたんに教育するというのではなく、教師との共同生活を尊重するという側面をもっています。

その条件の整わないままに無暗に学生数を多くして、人格的接触を稀薄にすることは危険です。同志社大学が諸学の総合と同時に教師と学生の共同生活の場としての大学というもの

の本質を生かしているかどうかを、鋭く反省しなければなりません。今日の大学が、稀れならず、社会が大学にたいして要求しているものに迎合することに汲々として、ただ資本主義社会の要請にのみ適合する姿勢をと

り、その職人教育の場になっていることは問題であります。

ゆがんだ人間像を生むもの わたしは単なる唯物論者ではありません。唯物論も唯心論も、それは人間存在の一面面を語っているのです。人間を論するとき唯物論をさけて通る

のは誤っていると考えています。しかし唯物論の側面だけ——わたしは唯心論に反対ですが——人間をとらえることも、それはまだ

周辺的であるとおもいます。キリスト教的思想惟にとつて大切なものは、唯物論のなかを突きぬけてゆく有神論ではないでしょうか。

さて、現在の大学はともすれば資本主義的に役立つ人間という観点から局部的な技術理性のみを中心に学問を組みたててゆこうとするために、人間についての思索との統一を見失い勝ちです。真実の専門化は総合性の地盤を見失つては成りたらず、単に局部的な場面

のみに閉じこもるいわゆるコンパートメント・ライゼイション（局所化）では人間の世界を扱い切れません。そこでは奇形な人間が作られてゆく。ですから技術の一面面では非常にたかい学問水準にたつていながら、人間全体との繋がりを見失っているために、結局

は人間疎外をおこしている。さきほど指摘をされたように、他人の労働の成果にたつて少数の者が学んでいる。そういう社会構造への視野を喪失して、自分たちの狭いコンパートメントライゼイションのなかで、安易にものを考えてゆくということが起つている。そこに歪んだ専門家の人間像のうまれる真因があるのです。

普遍性のなかで特殊性を シカゴ大学で学んでいるとき、私はハイエクのドクター・コースのクラスに聴講しました。わたしはかれとは全く思想を異にしておりませんが、彼の謙虚な学問的態度には心惹かれるものを感じました。かれは自分の主張の正しさを確かめるために、学内の哲学や言語学、医学などい

ろんな分野の先生を自分のクラスに招いて話してもらつて、人間というもの客観的な姿を把握しようと努力しているのです。その限りにおいて、私は学問の普遍性に忠実たんとするハイエクに好感をもたされたのです。われわれはこれから、各々の学問領域のスペシアライゼイション（専門化）をインテグレイション（総合）とどう関係付けてゆくべきかを考えなければならぬのです。

私は自分の親しくしているある電子工学の

若い学徒にこの話を致しました。ところがこれはインテグレイションなんてものは「おじいちゃん」のいうことであって、われわれは電子力学のぎりぎりのところを追求しているのだから、人間世界一般との関係などということに気にしていたのでは、たちまち学問的に遅れてしまふんだ、人格や人間の運命などということとは問題じゃないと、あっさりいい切るのです。わたしはかれの学問に対する厳しさに共感を覚えるけれども、そのような独善的態度に極めて危険なものを感じないではいられないのです。同志社教育では、人間の問題を考える場をもちながら、そこで自分の特殊なもち場を深めてゆくという、そういう専門家を養成しなければならぬのです。

巨大社会はビュロクラシーの支配する場所となります。そこには自分の当面の事務をやって、それで自分の責任が果たたとおもっている人間がごろがっています。そこから、社会的責任をもつ人間は生まれてこないのです。例えば医学において、医学の倫理が語られないで、医学の技術だけが訓練されると、人間を忘れた片よつたものになります。

人間を全人的にとらえてゆくこと、ここに

同志社の一つの特徴があるとおもふのです。同志社のチャペル・アワーやアッセンブリー・アワーなどはそのよい例です。それは自分の狭い視野を超える全人的・世界的視野、つまり普遍性のなかで特殊性を考えてゆく場です。

「蒼生のために死ね」 また人間の問題を考えてゆく場合、ただ便利に役に立つという観点からではなく、いまの社会に直接には役に立たないけれども、人間存在の意義をしつかりととらえた人物を送りだすところに、同志社教育の真髓があるのではないでしようか。聖書はただ「へびの如くさとく」と教えているだけではなく同時に「この世の愚か」の途を説き、「この世に做うな」と教えています。ここに同志社の固有性があるのではない。灘高校や日比谷高校のような教育をするところがかならずしもいい学校だとは思いません。

それからさきに指摘されたことですが、多数の人びとの労働の成果の上にたっていることを忘れないということは同志社のはじめからの姿勢であるとおもいます。新島先生は卒

業式のとき学生を校門まで送ってゆかれて、「蒼生のために死ね」といわれたのです。新島先生が同志社を創立された当時、日本社会の進歩性を荷負うものは、新興ブルジョワジーであった。かれらの新生命を通して封建制を破る、それは確かに同志社の一つの時代的役割であつた。しかし同志社の真髓は単にブルジョワジーの育成にあつたのではなく、もっと深いところにあつた。実業家や政治家になる人は世にたくさんいる。しかし同志社は、蒼生のために死ぬところの人物を送り出したいのだと先生はいわれたのであります。現代にあつても、これは日本の未来を築く同志社の根本的なあり方ではないでしようか。

新島襄脱藩の意味

鶴見 俊輔

△文学部教授V

はじめに 人間に対する同志社的な角度をみつける、つまり日本人のみならず、世界の人に対する同志社的な角度を新しくみつければならない、というふうな問題をたてたいとお

もいます。

その場合、新島襄脱藩の意味というものがもう一度問われなければならないだろう。脱藩ということは現象的には日本からアメリカに行ったわけですが、そういう受けとりかたからすれば、いまのアメリカ流の学問を日本にとり入れてゆけばいいということになるでしょう。しかし幕府が鎖国を強制している制度の下での脱藩の意味はちがうのであって、それを受けつぐことが、新しい同志社の教育の理念になるんじゃないかという気がします。

こういう問題は理想と伝説の部分だともいいますが、理想と現実を混同することはわれわれの気持をなぐさめるでしょうけれど、これはやはり区別しなければならぬ。

同志社の歴史をふりかえって わたしは同志社の歴史は、三十年の栄光の歴史と六十年の衰退の歴史であるとおもいます。三十年のプラスと六十年のマイナスの、この二つの部分に別れるという気がします。

これを十分に説明することはできませんが十二、三年前、わたしの先生だった石川三四

郎という人が亡くなったとき、その葬式に二瓶要蔵という牧師が来て、話をされたんです。

この人は朴訥な人ですが思っていることをボカボカいうのです。自分は同志社で勉強したとき、わたしの友だちの高畠素之がたいへん石川さんをシェウハイ（崇拜）していましたっていうんですね。かれは平民新聞を読んでいるうちにしまいに平民社にいつちゃったんです。そういう思い出がじつに生き生きしていて、いまでも耳にのこっている。そういう空気がたしかに同志社にはあったんですね。あとで調べてみて日本でさいしょに資本論を翻訳した高畠素之であることを知りました。日本の思想史を勉強すると、徳富蘇峰にしても徳富蘆花にしても、それからふつうには同志社と結びつけて考えられない山川均にしても、みんな同志社の磁石にひきつけられている。そういう空気が明治三十年代、いまの二瓶さんが高畠氏といっしょにいたのは三十年代の終りですが、それまであったんです。なか日本精神の活力がここにあって、日本のなかで働いている巨大な磁石になってたわけです。その磁石の力は四十年頃までで、それ以後は力が失われてきて、そのあとの六十

年が来たとおもいます。

同志社はすでにできあがった才能をひきつけるのではなく、これから何かをなす人々をひきつけて、それらの人々になにかの精神の活力を与えたのです。若いあいだにひきつけられた人間というのはなにか相互に作用する、そのことによって人物が束になって輩出するわけですが、若いときには、特に大学の初期ころまではたがいに作用しあって、内面性が作られてゆきます。同志社ははじめの三十年間、そういう磁場であったとおもいます。これをぬきにしては日本の精神史は語れないでしょう。それが四十年以降、衰退したという事実を認めないでは、改革はおこなわれないとおもつ。

同志社の輩出している人間 なぜ同志社が衰退したかという点、一つは官立大学と私立大学とのバランスが崩れたことによるのではない。丸山真男の説によると、初期には明治政府が非常にいいパイプをつくって、人材を登用したが、それが大正、昭和になって詰まってしまったというのです。そのなかで、詰まりながら最後まで働きつづけたのが官立

大で、貧乏な秀才は高校まで援助でもちた
えれば、あとは東大法学部へ行つて、優秀で
あれば大臣は約束されたわけです。いちばん
早くつまったパイプの一つが同志社で、した
がつて貧しい、向学心に燃えた学生が前途を
切開くという可能性はやくに失われてしま
った。このことは同志社の衰退と無関係では
ないでしょう。とくに、学費値上げというも
のは、これに大きな拍車をかけているとおも
います。

わたしは、京大、東京工大を経て同志社にき
てからはじめて会ったようなタイプの学生が
います。その一人はラジオが好きで、ラジオの
プログラムをテープにおさめて、すぐたく
さん集積している人です。卒業論文はラジオ
のプログラムについての分析なんです。こう
いう学生は、国立大学ではみられなかった。
この人は、日本で生んださいしょのラジオ学
者になるかもしれません。東大でラジオ学を
やってる人でもアメリカのラジオの調査の引
写しで、これは秀才のやることであって、秀才
はラジオをきかないものです。ところがこの
同志社の学生はラジオが好きで、子どものと
きからきいてきた親しみを学問的方法論によ

つてのはしてゆく、これはアメリカのラジオ
学を翻訳するよりも本格的なラジオ学です。

もう一つの例。同志社にあるクエーカーの
ワークキャンプ運動の人たちが二年半ほどま
えに、ライのなおった人たちのためのホーム
を作る運動をはじめたのです。ところがホー
ムを建てようとして地元の反対運動がおこ
り、二年半もみにもんで、半分作りかけた建
物を壊しにきて、途中でストップしてしまっ
た。それがさいきん、調停案をのむことで解
決したんですが、この二年半のあいだ、壊さ
れかけながら工事を中断して地元の説得にあ
たるといふみごとな持続の姿勢の結果とし
て、いい解決をみたのです。

改革のために こういう学生がいまの同志
社にいます。しかしこれは例外です。一万六千
人もいるんですから、大きな網をうっている
結果であるにすぎません。それを確率以上の
ものとして求めることはできないか。もっと
合理的に設計できないか、ということですが、
そのための改革案にはいろいろあるとおも
います。たとえば学費値上げの問題ですが、
値上げはしないほうがいいが、どうしても値

上げしなければならないのなら、フル・スカ
ラシップを十なり二十なり設けることです。
それを各学部で割当て、審査を厳重にする。
知能の高さとともに、社会にたいする気概の
ある学生を選ぶんです。そうすれば、半世紀
のうちに同志社は変るでしょう。さらに英米
学部というような妙な構想なんかやめて――
はじめに新島脱藩の意味を考えたいといつた
のはこのことと関係があるわけですが――国
際学部を設けて、台湾人、韓国人、ベトナム
人、インドネシア人、フィリピン人などに門
戸をひらいてゆくほうがいいとおもいます。

豊かな個性と誠意を

長 石 忠 三

△校友・父兄・京大結核研究所長▽

同志社に期待する人間像――個性が豊か
で、善意と誠意と熱意とをもって世に処する
多彩な人間像が生まれることを期待する。

同志社はどのような教育をするべきか――
教育には常に暖かい気持が底に流れたある種

の厳しさが必要である。

日本では入学がむづかしくて卒業が易しく米國では入学が易しくて卒業がむづかしい傾向があるが、後者の方が本当かと思う。半数は成績順により、半数は公の寄付金により入学を許可し、その代りに学中には厳しくしめて、大学教育に不適格なものは途中で転向させるといったことも、私学では比較的やり易いのではないだろうか。

また、「多士済々各々その長とするところをとる」というのは、若い有為な人たちを育てる際の私の心の戒めであるが、以上はいずれも先生側の教育者としての自覚が強く、先生と学生との間の人間的な接触を密にすることなくしては達せられないかと思う。

同志社では特にどのような教育をと問われると、校祖新島襄先生のお言葉にある「良心を手腕に運用する人」を育てるということでよいのではなからうか。しかし、言うは易く行なうはむづかしい。すべてはまずその気になることに始まり、終始熱意をもって事に当るにより始めて達せられることを忘れてはならない。

人間と人間のふれあいの教育

木 山 勉

△父兄・山形県教員▽

教育は、人間と人間とのふれあいでなければならぬ。ゆれ動き、悩み苦しむ魂に働きかける仕事である。このことなくして、学園への情熱も真理の探究のために生命をかける人間も誕生し得ない。

人間が物質文明の奴隷になり、動物的な欲望に走り、人間性の喪失を招いたことも、学生が、生を享受するために、あるいは職に就くための手段や条件として学ぶようになったのも、魂の教育を忘れて、いたずらに産業技術に奉仕する部分品的な人間を作り出したためである。

同志社こそは、この人間の機械化・動物化を打破し、人間性の回復をなし得る精神的核心を持っている筈である。

「一国の良心とも謂う可き人々を養成せん」と欲した新島精神は、題目であってはいけ

ないと思う。

自由と権利のみ謳歌して、責任と義務を忘れ、自治自立の真意もわきまえずに行動をなす学生は、新島門下として恥すべきである。

同志社に期待する人間像は、キリスト精神や新島精神を具現する「良心の全身に充満する大丈夫」な筈である。

その精神が題目だけに終ることのないように厳粛に日々の教育実践で生かしてもらいたい。それには魂をゆさぶる人間と人間とのふれあいの教育のみであると思う。

理想実現のためのエネルギーを

岩 田 英 彬

△毎日新聞 記者▽

私は京都で育った人間ではあるが、小学から大学まで一貫して国、公立を歩んだせいもあり、私学としての同志社に対する認識も浅かった。京都で勤務することになり、たまたま大学を担当して、同志社の先生や職員の方たちと接してきた今は認識を新しくしたつも

りである。とくに同志社が、京大などで感じられる冷い、人間の疎外されたムードとちがつて、明るいビビッドなムードを持っていることを好ましく思っている。

私学のよさはやはり国立学校にない特色を発揮することにあると思う。だから国立なみの内容をととのえることは意味がない。私は清潔な人格を基調にした民主主義者を育成することを同志社に期待したい。そしてこの人間像は、理想の実現のためかぎりない前進を続けるダイナミックなエネルギーに満ちたものであつてほしい。

幕末の日本を動かした西南日本の諸藩中、土佐藩の歴史を見ると、南学という名の学問の伝統が流れている。この南学は「知行合一、学行不二」をその根本精神とし、これが坂本龍馬ら多くの志士を生んだ精神的風土といえる。同志社は社会改良に役立つ生きた学問の研究をしてほしいし、常に学ぶところと行なうところが、一致する人間を育ててほしいと思う。

建学の精神を明示せよ

井 植 薫

△父兄・三洋電機専務取締役V

大学の教育について言及する見識をもち合わせているものではございませんが、日頃、私の子供なり、私共の会社で活躍されている卒業生諸氏を通じて、所感の一端を述べたいと存じます。

現今の技術革新に代表される機械文明の発展のもとにおいて、企業活動においては言うまでもなく、私達の人間活動のあらゆる分野は、いよいよ、集団の中の活動に移行し、同時に、個人の相互影響も一層強くなるように考えます。ここに社会人として、また、一人間としての意義がうかがえるように思えます。このような社会情勢を考慮するとき、大学においては今一度、校祖建学の精神を、現在の社会に立脚し、現在の青年の考え方に強く共鳴する形で、具体的に明示し、それが学校施策の中で一貫して展開されているか否かを

を、検討する必要があるように考えます。人間形成の努力は最終的には、学生各人の努力によるものですが、その目標を明示し、常に努力を啓発するよう教育するのは勿論のことですが、全校友、父兄もまた、各々その一端をになうものであることを再確認しなければならぬと思います。このような環境の中で、現在の社会に適應しうる知性と、正しい判断・行動が実践できる資質を育て、寛容と忍耐・奉仕の精神を、現在社会の人間関係面において、充分伸ばされ、創造的に前進する意欲のある人間像を期待したいと思えます。

正しい人生観をもて

酒 井 美 智 男

△校友・父兄・京都YMCA総主事V

与えられた主題に対する意見を述べるに先立って、そのような意見を抱いている私の背景を知って頂かねばならないと思う。

私自身が同志社中学から大学へと一貫教育

を受けているだけでなく、三人の子女（二男一女）も残らずそうであると言う事実である。

もし私が同志社以外の学校で学んでいたら、恐らく私の人生の歩みは全然別の方向に進んでいたに違いない。同志社で教育を受けたことは、私にとってそれほど重要な意味を持つていたのである。それだからと言って私は自分の子供たちにも自分と同じ道を歩ませようとして同志社の一貫教育を受けさせたのではない。道は自ら選ぶものだからである。同志社教育に期待するものは、自ら道を選ぶことの出来る人間、言いかえれば正しい人生観、世界観を持つ人間を育てて欲しいことである。そのためには、人間形成にとって最も大切な少年期から同志社に学ばなければならぬ。大学教育だけで真の同志社教育を期待するのは、期待する方が無理である。大学のマンモス化は同志社だけの現象ではないが、これでよいのかと首をかしげざるを得ない。「独り技芸才能ある人物を教養するに止まらず、良心の手腕に運用する人物を出さんことを務む」との新島先生の宿願は、一体どこで果されようとしているのか。

私の心からの願いは、男女を通じて同志社

の中・高校が一層充実されて、その出身者が大学での中核となって欲しいことである。

神話からの脱却

田中 繁 男

△読売新聞 記者▽

「新島精神」がマスプロ化したいまの同志社に果たして生きているのだろうか——わたしはそんな疑問をもつことがある。

同志社マンはことある毎に「新島精神」を口にする。一昨年の学費値上げ問題をめぐって理事者と校友会が衝突したときもそうだった。話し合いの席上、両者から「新島精神」が乱発され、校友会の諸君は形勢不利と見るや「地下の新島先生が泣いていますよ」の「切り札」をだすが、耳にタコができるようでは効果なんかあろうはずがない。

早稲田の大隈、慶応の福沢同様、新島の建学の精神は同志社にとって命である。有名？な珍話がある。車中で会った初対面の教授と卒業ま近い学生の対話でチャペルアワーが話

題になったところ学生は「ボクはチャペル先生の講義をうけなかったもんで……」と平然と答えたということだが、ただの珍話としてすませない要素をもっているのではないだろうか。そんな話を聞くといまの多くの同志社学生諸君にとって「ニイジマ」は学園の命どころか、神話の一登場人物に過ぎないのではないだろうか——そんな錯覚をもつことだってある。

アウトサイダーのこんなつまらぬ疑問を解く意味からも同志社は神話でなく、現代に立脚した新島の教え、時代を咀嚼（そしゃく）した「新島精神」を各地から集い来たった「良心の充満した丈夫」たちに教育する義務、また学生たちもそれを求める務めをもっているように思う。

フアイトをもて

新 居 利 隆

△校友・父兄・四國財務局主計課長▽

私は今までよく校友会には出席している

が、その都度感ずることは常連の数の少いことだ。一回か二回来たら来なくなる。来なくなった若い人に聞くと「行ってもつまらない、ちつとも面白くない」。成程考えてみれば

私自身も魅力を感じて出席しているわけではない。いわばお義理で出ている。世代の相違もあろうが、それ以外に何かあるのではなからうか。老若男女が一家をなして結構うまくやっていることを考えれば、何か考えさせられるものがある。何故魅力がないのだらうか同志社は在学中は楽しいが、出ればつまらない。他の学校のような繋りがないとよく聞かされる。人間関係に何か欠けたものがあるのではなからうか。また同志社の学生にはネバリがない、頑張りがないとよく言われる。私の職場にも数名の同志社人がいるが共通していることは温和である。考え方によれば覇気に乏しいのである。昨年就職した私の長男が会社の機関誌に「人並以上の根性、フアイトを持った人が必要視される」と書いていたが、同志社時代にはそれを感じず、社会へ出て初めてそれを感じたのでしよう。京都という土地、同志社という温床がそうさせたのかも知れないが、やはりこれからの時代には

ガメついくらいの根性と共同生活の出来る人間を同志社は育成する必要があるのではなからうか。私は同志社教育にそれを望む。

期待される人間像とは？

久 永 省 一

△中学校長▽

一月の十一日に中央教育審議会から「期待される人間像」の中間草案が発表された。このために特別委員会が設けられ、十七回も会議を開き慎重な検討ののち、この「人間像」が生み出されたという。その委員というのは天野貞祐、大河内一男、高坂正顕、大仏次郎、高村象平氏など錚々たる学識経験者十六名である。この「人間像」は、これらの人たちが知恵と情熱を傾けてつくった結実といえるかも知れない。

ただそのすべてが誰にもすなおに吸収されるものとは思われない。たしかにいささか引っかかることもあるようだ。しかし、そこには大胆な意志がある。そして今の日本の荒

廃した精神的風土に対するはげしい叱咤と強い暗示がある。つぎの文章がその一つ。

「また吾々は生命の根源に対する畏敬の念をいだくべきである。吾々は自ら自己の生命を生んだのではない。吾々の生命の根源には父母の生命があり、民族の生命があり、人類の生命があり、宇宙の生命がある。しかしここにいう生命はもとより単に肉体的生命だけをさすのではない。吾々には精神的な生命がある。このような生命の根源に対する畏敬の念が、真の宗教的情操であり、人間の尊厳と愛もそれに基づき、真の幸福もそれに基づく」。

この「生命の根源」という言葉は神を指している。神を忘れて国民に、人間幸福の根元がそれにつながることにであると提言する大胆さに敬意を表したい。

アンケートのうち、井ヶ田、嶋田、鶴見教授のご意見は同志社大学の「宗教部報」第11号より転載したものです。